

福島第一原子力発電所1号機4階における出水事象
に関する出水当時の状況等について

甲D506号証

1. 本資料の位置付け

- ・本資料は、福島第一原子力発電所1号機4階における出水事象の目撃者に対して、出水当時の状況等について面談形式で確認（インタビュー）した内容を原子力規制庁においてとりまとめ、目撃者へ内容を確認いただいたものである。

※詳細な内容は、別紙のとおり。

- ・本資料は、福島第一原子力発電所1号機4階における出水事象の解明を目的として作成したものであり、福島第一原子力発電所事故に係る責任追及に使用されるものではない。

2. 本資料の公開について

本資料の内容を公開する場合、行政機関の保有する情報の公開に関する法律第5条に定める不開示情報である「特定の個人を識別できる情報（個人情報）」や「法人等の正当な利益を害する情報（法人情報）」等については、伏せなければならない。

3. 本資料の内容について

本資料は、福島第一原子力発電所1号機4階における出水事象に関して、面談形式で確認した内容に基づく内容となっているものであることに相違ない。

<資料内容確認者（インタビュー対象者）>

確認年月日： H25年 6月 14日

所属： 

氏名： 

<資料作成者>

作成年月日： H25年 6月 14日

所属： 原子力規制庁

氏名： 池内 敏大

福島第一原子力発電所 1 号機 4 階における出水事象
に関する出水当時の状況等について

平成 25 年 6 月
原子力規制庁

1. 地震発生前までの作業状況

(1) 作業目的

- ・ 1 号機 4 階の M C C (モーターコントロールセンター) の脇に M C C を点検するための作業用の組み立て式の足場 (脚立よりはもう少ししっかりしたもの) を納める鉄の箱を設置するための作業をしていた。

(2) 作業内容

- ・ 5 階にある原子炉建屋天井クレーンを使って 1 階の荷物 (鉄の箱) を 4 階に上げ、その後、アンカーを打ち、鉄の箱を完全に固定するところまで作業を行う予定であった。

(3) 作業実施者

- ・ 当該作業は、5 名で実施していた。
- ・ A 氏 (インタビュー対象者) は、5 階の天井クレーンを操作していた。
- ・ 他の 4 名のうち、2 名 (B 氏、C 氏) は 1 階でクレーンに荷物を取り付ける作業をしていた。また、残りの 2 名 (D 氏、E 氏) は 4 階で 1 階から上がった荷物を開口部 (大物搬入口) 付近に下ろしていた。

(4) 作業状況

- ・ 他社の作業が早く終わったことにより、当初の予定より 20～30 分くらい早く作業を進めることができ、地震が発生する前までに 4 階に荷物を全て上げることができた。
- ・ 荷物を上げ終えた後、A 氏は原子炉建屋南側の階段で 5 階から 4 階に下りてきて、原子炉建屋南側の通路を通して、開口部の辺りに戻ってきた。そこで D 氏及び E 氏と今後の作業の段取り (M C C の前にアンカーを打って箱を取り付けるために 1 階の材料を持ってくる必要があるといったこと) について話していた。
- ・ 作業全体としては、アンカーを打って、鉄の箱を完全に固定するところまで行う予定であったが、アンカーを打つ作業は実際にはやっていない。
- ・ 開口部について、5 階床の開口部は 5 階における作業終了後に閉じたため、地震発生時は閉じられていた。なお、1 階から 4 階の開口部は開いていた。
- ・ 作業時は、B 服 (管理区域内で着用する作業着) を着ていた。

(5) その他

- ・ A 氏が原子炉建屋 5 階で作業していた時には、同じフロアで他の作業をしていた協力会社の作業員が 5～6 名いたのが見えた。

確認者：

作成者

池内

2. 地震発生時～出水目撃時までの状況

- ・ A氏は、原子炉建屋5階で天井クレーンの運転をしていて、4階に据え付ける荷物を上げ終わったため5階から4階に下りた後、4階で作業をしていたD氏及びE氏と今後の作業の段取りについて話していた時に地震が発生した。
- ・ 地震発生時にA氏が立っていた場所は、開口部付近のジブクレーンの真下であった。ジブクレーンのフックがすごく揺れて、ガチャガチャしていた。その音が大きかったので、上から落ちてくる物が何かあるのではないかと思います、上ばかりを気にしていた。揺れを感じていて音もすごかったので、ずっと上を見ていた時に斜め上から水が出てきたのを見た。
- ・ あの地震がいつ頃発生していつ頃揺れが収まったという時間的なものはわからない。
- ・ 周囲は通常の明るさであり、照明が消えているといったことはなかった。

3. 出水目撃時間

- ・ A氏の感覚としては、最初の大きな揺れが始まってから1分を過ぎたくらいだった。
- ・ 出水を目撃した時も揺れは継続していた。揺れがなかなか収まらない地震であったという感覚はあった。

4. 出水の様相

(1) 出水目撃時の立ち位置、目線、視野

- ・ 出水時、A氏（身長：180cm）は開口部の柵をずっと押さえて（つかんで）立っていた。
- ・ 体は開口部の方を向いていて、開口部の柵をつかみながら南側のジブクレーンを見ていた。その後、左側より出水を見た。
- ・ 手すりをつかんで開口部の上部をずっと見ていたが、下の方は見ていない。
- ・ 左に振り向いた際に水が見えて、逆に振り向くと人が見えた。
- ・ 出水は、広いところから見えた。出水が見えた方向にはFCSがあったが低いので障害物にはならなかった。

(2) 出水位置等

- ・ 上の方には配管がたくさんあるが、そのあたりから（水が）出てくるのが完全に見えた。ただ、どこかの配管がつながっていることはわからなかった。
- ・ A氏が見たのは、FCSの上方であった。MCCはA氏の真後ろにあった。
- ・ 水が見えたのは、ほぼ天井の辺りであり、上から来た感じであった。少なくとも配管の下部にあった照明よりは上から来た。

(3) 出水形状、性状

- ・ 水は、バケツの水をバツと撒いた感じであった。水の勢いは、通常ポンプを回して出している水の吹き方よりは弱いという感覚はあった。表現として、バケツの

水を出したような感じであった。

- ・水が出てきた角度は、この角度（身振り手振りでおおよそ斜め45°くらい）だったと思う。
- ・水は斜め下の方に出てきてはいない。
- ・水がバツと出てきた瞬間に「逃げろ」という感覚だったため、水が落ちていくところまでは見ていない。水があったら中操（中央制御操作室）に連絡するという感覚があるため、出てくる水は汚染されているという感覚だった。そのため、水が落ちるところまで見る余裕はなく、床に水が浸った様子は見ていない。
- ・出てきた水の量は、瞬間的な表現としては、バケツ一杯の水だった。
- ・見えたものは、何の水かはわからなかったが、水とはっきりわかるものであり、霧状のものではなかった。

（４）周囲の状況

- ・手すりをつかんで上を見回していたが、上から水が落ちてくるようなものは見えなかった。仮にそのようなものが見えたら、もっと早く逃げていたと思う。
- ・水が出たあたりの配管が破断しているような様子は見えなかった。
- ・周囲は通常の明るさだった。

（５）その他

- ・地震発生前に5階で天井クレーンの運転をしており、使用済燃料の水を見ていたため、A氏の頭の中には、天井部から出てくる水は汚染している水という考えがなく、これに触れたら出られないというのがあったため、瞬間的に「逃げろ」という言葉が出てきて3人で逃げた。
- ・出水時の揺れは、経験したことのない揺れであったという感覚はあった。

5. 出水目撃直後の状況

（１）出水目撃直後の他の作業員の立ち位置

- ・A氏はジブクレーンの下にいて、他の2名（D氏及びE氏）も地震発生前はA氏の近くにいたが、地震が発生して気がついたら他の2名はICタンクの間にはいた。この時、他の2名がどのようにしてICタンクの間まで移動したのかはわからない。たぶん逃げようとしたのだと思うが、地震が収まるかもしれないので「待って」と声をかけた時に2人はICタンクの間にはいた。その間、A氏はジブクレーンのフックをずっと見ていた。
- ・D氏とE氏がICタンクの間にはいて、A氏がジブクレーンの下にいて水が出てくるのを見たので、A氏の「逃げろ」という言葉と一緒に3人で階段を下りていった。

（２）4階からの避難

- ・A氏は、ICタンクの間を抜けて、北側の階段へ向かった。
- ・逃げている最中も揺れていたが、揺れよりも水の方が怖かった。
- ・周囲で物が倒れたり、どこかが壊れたりということはなかった。

- ・揺れている最中に階段で1階まで下りていって、1階の原子炉建屋北東側の二重扉に最初に2人（D氏及びE氏）が中に入り、「早く早く」と声をかけられて、3人一緒にタービン建屋側の「松の廊下」に出て、ものすごいホコリだったが、松の廊下（通路）に1階の作業で使用していた作業指示書（作業表示札）と台車が置いてあったのを見て、1階にいた2人（B氏及びC氏）も避難したのだと思った。
- ・1階に下りたときも停電はしてなかったが、二重扉の辺りでオレンジ色の光がついたり消えたりしていたのは見た。それがなんだったのかはわからない。
- ・二重扉からは、通常の手順で出た。

（3）周囲の状況

- ・音を気にしていたのは、地震で揺れているときのジブクレーンのフックの音くらいであり、逃げている時は逃げることに集中していたため、周りを見る余裕はなかった。階段の方には何もなかった。
- ・振動、温度、風圧、においは感じなかった。
- ・床は、自分が走ったところは濡れていなかった。水は相当気にしているが、通常の状態だった。
- ・明るさは通常通りであった。通常時もそこまで明るくはないが、避難に支障があるような暗さではなかった。非常灯は点いていたかどうかはわからない。
- ・逃げるときは、がれきは落ちていなかった。I Cタンクの保温材がはがれていたかどうかは見えていない。逃げている時は真正面しか見えていない。
- ・I Cタンクの間にはD氏とE氏がいたので、揺れているときに保温材等がガラガラ落ちたということはないと思う。

以上

確認者：



作成者

伊内